

バツハ時代のライプツィヒに おける「歴史的礼拝式の復元」

本山秀毅

(大学神学部嘱託講師、大阪音楽大学助教授)

「温故知新」という言葉がある。

千年期の世紀末を迎えて、話題は新しい世紀に集まりがちであるが、先日アメリカの新聞『ウォールストリート・ジャーナル』に千年前の歴史的な紙面を構成したという話題があった。日本に關しての話題は、現在のアメリカの権力者にも通じる、「藤原道長の不倫」などというパロディックなものであった。

常に前向きに最新の情報や技術を取り入れることももちろん必要ではあるが、ときには過去のことを思い返すことにより、新しい着想を得るということも重要だと思われる。

さて、今回同志社栄光館で行われた「バツハ時代のライプツィヒにおける歴史的礼拝式の復元」は、まさにその好例であったように思う。それが「礼拝式」という極めて限られた目的をもつ催しであったにもかかわらず、受け取り方によって大き

なイメージの膨らみを参加した者に提供したのであった。

さて、ヨハン・セバステイアン・バッハ（一六八五〜一七五〇）は音楽ファンならずとも、その名を耳にすることが多い作曲家である。「音楽の父」として麗々しく音楽教室の壁に、かつらを被った肖像画が掲げてあったのをご記憶の方もおられるだろう。この「音楽の父」という呼称は誤解を招きやすく、すべての音楽が彼より始められたかのような印象を与え、またそれがいかにも権威ある堅苦しいもののようなイメージを形作ってしまうのである。彼は、その半生をプロテスタントの教会の音楽家として過ごし、任地の教会でオルガンを弾き、礼拝のための音楽を作り、聖歌隊を教育するといった、どちらかと言えば地味な生涯を送ったのであった。礼拝のための音楽には、前奏曲などのオルガン曲のほか、主に「教会カンタータ」とよばれ



る、聖書の福音を音楽によって表現したものが作られた。ほかに、彼の生涯にわたって活躍した地域が、宗教改革の余韻さめやらない地方であったにもかかわらず、その典礼にはカトリックのミサの一部分なども残されており、ミサ典礼文を歌詞にした音楽も書かれている。彼の時代の礼拝は、現在の普通に行われているプロテスタントの礼拝式よりも典礼的で、音楽がふんだんに用いられており、また時間もはるかに長大なものであった。また、彼が活躍した都市のうちでも「ライブツィヒ」時代は最も充実し、多くの名作が生み出された時期として知られている。

われわれとバッハの音楽との接点はさまざまである。ピアノの教材として「インベンション」や「平均律」などを弾く人もあれば、喫茶店でBGMとして流れる「ブランデンブルグ協奏曲」に耳を傾ける人もある。演奏会でそのプログラムを構成している多くの名曲を聴く人もあるだろう。そして賛美歌にもいくつかのバッハの旋律が取り上げられ、礼拝の中で歌われる場合もある。しかし彼の教会音楽について言うならば、演奏会場で聴かれるバッハの教会音楽は多くあるけれども、作曲者がそうあるべきだと考えた形で演奏され、またそのように聞き手に受けとめられていることは、われわれの周囲においては、極めて稀である。その意味において、彼の教会音楽が当時どのような流れで演奏されていたのかを知り、オルガンの前奏曲やカンタータ、ミサはもとより、会衆の歌うすべての賛美歌、リトルギーの短い音楽にいたるまですべて当時の資料により再現される今回の催しは、音楽的にみて大変貴重であり共感を呼ぶもの

であると考えていた。

今回は、バツハ時代の礼拝学の権威で、ライプツィッヒ大学の神学部教授やバツハ協会の要職をつとめるマルティン・ペッツォールト氏を考証、司式者としてドイツより招聘しての催しであった。そのほか演奏にたずさわったのは、ソリストとして、松下悦子、西野七栄、西垣俊朗、片桐直樹の各氏、オルガンを中山幾美子氏、京都バツハ合唱団、大阪チェンパーオーケストラの演奏、指揮は本山秀毅が担当した。そして説教者として同志社大学客員教授の大林浩氏にお願いした。主催は同志社大学神学部、キリスト教文化センターと前述の京都バツハ合唱団、そして当日同志社教会の皆さんにも大いにお世話になった。今回ペッツォールト氏を招くことができたということが、この催しをバツハ研究の本流に繋がるものにしてくれたと確信している。

実際彼が予定通り来日してさえくれれば、前回（一九九二年）にも同様の催しを行った経験から、礼拝式自体は滞りなく進めていけると考えていた。しかしこの礼拝式がどのように人々に受けとめていただけるか、また栄光館のたくさんの座席を埋めるだけの参加者があるかどうかは、開式直前まで正直言つて不安であった。

参加者については、事前の宣伝も行き届いていたとは言いがたく、入場券や整理券で人数を把握している訳でもなかったが、その悩みはすぐに杞憂に終わることとなった。礼拝式の開始一時間前くらいから人々が集まり始め、千部近く用意した当日の式次第が、足りなくなるといふ状況になったのである。

もうひとつ私が抱えていた懸念、参加者の受け止め方につい

て少し述べたいと思う。通常の演奏会では、私は指揮者として背中を向けていることが多いので、演奏途中の客席の様子などは分からないが、今回は正面を見て待機していることも多く、参加してくださった皆さんの様子を充分伺うことができた。わたしは何より強くまた嬉しく感じたのは、この三百年も前の、遠くライプツィッヒで行われていた礼拝式に参加された皆さんが、単に博物館の見学のような興味だけで臨んでおられたのではなかったということである。

大部分の方が、ドイツ語やラテン語の式文を目で追い、あるいは口ずさみ、その礼拝式を共有しようとしてくださった。もちろんすべて完璧にといいわけにはいかないと思うが、大部分の流れは把握されていたように思う。さらに重要なことはその上で、その内容や精神を体感し共感をもつてその流れに身を任せておられた方が多かつたように見受けられたことである。まさに「礼拝に（積極的に）参加されていた」のである。

われわれの周囲の礼拝の在り方はさまざまであると思うが、ある意味で牧師の説教を「聞きに行く」だけのものになっていて、新鮮さが欠けることなどもあると思う。そんな中で普段の礼拝とは比較にならない、豊かな音楽的インスピレーションに触発されて、もちろん個々の経験の差はあるとはいえ、宗教的な感情とでも言えるようなものが、皆さんの内から紡ぎ出されていたような気がするのである。まさに、「温故知新」を強く感じさせてくれた瞬間であった。

また、礼拝式の後半部分で「聖体拝領」が行われたとき、その列をつくられた延々途切れることのない人の数は圧巻であつ



た。これも百枚用意したホステイアをベッツォルト氏の機転で三分の一ずつに割って差し上げなければ、その数が足りない有り様であった。カンタータの後半部分が、この儀式のBGMになっていることは意外に知られていないのだが、バッハの音楽が人々の拝領の列に染みとおるように鳴り響く様子は、まるで時間がスリップしたかのように荘厳な雰囲気醸し出していた。私はその間に、バッハの宗教改革記念日のためのカンタータ『神は我がやぐら』を演奏しながら、まさに十八世紀の敬虔な宗教生活と、現代日本との幸福な邂逅を心から実感したのである。

私ははじめ、先に述べたようにこの礼拝式の意義は、バッハの音楽が、どのような形で礼拝の中に生かされ、人々に影響を与えていたか、またそれが本来あるべき形で、参加された皆さんに受けとめられるかと考えていた。いかなれば音楽の面からの理解や把握を期待していたのである。しかし礼拝式に集った人々は、わたしの浅はかな予想をはるかに越える豊かな経験と感性をもった空気を感ぜさせた。もちろん年齢から醸し出される存在感もあつただろうし、若い人々には希求するものに対する鋭敏な神経が感じられた。おそらく私が「このような理解をしていただけたらなあ」などと考えていたのとは想像もつかない膨らみをもって、はるかに実り多い、有意義なとらえ方があつたのだろうと推測する。あるいはそれは個々の皆さんの宗教的な経験や感性の部分と、この礼拝式の空間が、大いに響き合うものであつたということができるのかもしれない。

わたしはこの礼拝式が、バッハの音楽と聖書、そしてルターの改革精神が、共鳴しあつてひとつの空間を生み出した中で、

それらを知り、感ずることから参加した皆さんの中に新しい何かが生み出される端緒になったと確信している。心の問題が云々されるこの時代にあつて、神学部の担う役割も少なくないと思う。この神学部から発信された催しが、一つの大きな拡がりをみせたことを、心から嬉しく思っている。

宗教改革記念日の礼拝式（式の概略）

（聖ニコライ／聖トーマス教会（一七三六年一〇月三十一日）の復元）

- 点鐘のちオルガン前奏（バッハ／オルガン前奏曲ハ長調（BWV 547））
- ラテン語によるモテット（「とどまらせたまえ、あなたの御言葉に」）
- バッハ／ミサ曲ト長調（BWV 236）
- 祝祷ならびに集祷
- 使徒書簡朗読（セカリヤ書14…11）
- オルガンによるコラール前奏に続き、会衆によるコラール（福音教会聖歌集117番）
- 福音書朗読（ヨハネ黙示録3…11-13）
- オルガンによる前奏に続き、カンタータ第80番「神はわがやぐら」（BWV 80）
- 信仰告白／祝祷
- 会衆歌／主の祈り／説教テキストの朗読（ヨハネ黙示録）
- 説教
- 執り成しの祈り（牧師と会衆による）
- テ・デウム（合唱隊と会衆による）
- 聖餐式（主の祈りのあと聖餐設定辞／陪餐、同時にカンタータ第80番の後半）
- オルガン後奏（バッハ／フーガハ長調（BWV 547））

学校図書館におけるコンピュータの活用

家城 清美

(女子中学校・高等学校職員)

—全国学校図書館研究大会での報告—

一九九八年八月三日より五日迄、金沢市で第三十一回全国学校図書館研究大会が催された。この大会は、国・公立及び私立の小・中・高校で組織される全国学校図書館協議会が主となり、隔年毎に全国大会を開催している。今回は、百以上の分科会を有し、約二千四百人の学校図書館関係者が全国から参加した。私は、コンピュータを活用している学校図書館の実践発表をするよう協議会より依頼された。現在、学校図書館のコンピュータ化が進んでいるが、導入後数年を経、コンピュータが図書館運営にどのように定着したかの発表であった。コンピュータ化や導入後の経過についての関心が高く分科会は満席状態であった。今大会での本校の発表より十年前、札幌市での同大会で、同志社香里中・高校図書館に勤務されていた平井むつみ氏のコンピュータ導入についての発表がある。当時、学校図書館の

ンピュータ化は希で、実現化された高校としてモデル校的、先駆的存在としての発表であり、全国的に注目され、多くの見学者が同図書館を訪れた。本校もその一校であり、同志社内にモデルにできる図書館があるということは、コンピュータ導入に際して心強い存在であり、実際細々と相談に応じていただいた。本校も、一九九三年、新図書館開館と同時にコンピュータを使つての図書館運営が始まった。今回発表の依頼を受けた時、同志社傘下で香里中・高校の発表から十年後、コンピュータでの図書館運営の実践発表をすることに縁を感じずにはいられなかった。発表は次のようなものである。コンピュータ導入により、より多角的な検索や迅速な貸出・返却手続きが、サービスの向上に繋がった。本校の生徒は図書館をよく利用する。特に、高校生は教科担当教員と相談し、課題を決め資料を収集し、レ

ポートを作成する。資料収集では従来の検索に加え、キーワードによる図書検索や雑誌検索が可能となった。又、必要な資料の検索が迅速になり、資料集めの効率がよくなり、図書の管理も容易になったことで、貸出冊数の増加など利用者の便宜を図れるようにもなった。蔵書点検ではコンピュータが大いに威力を発揮している。統計作成も簡単になり、それらの統計は図書館の自己評価の手段となっている。利用者の図書館に対するイメージや生徒図書委員の活動の変化、関係図書のリスト作成やオリエンテーションでの利用者への支援、事務処理の効率化などコンピュータ導入による図書館運営への影響力は利点として多くをあげることができる。コンピュータの導入は運営の効率



や利便性を高め、さらに外部資料へのアクセスなど図書館の活動を発展し向上させる第一歩である。

反面、今後の課題もある。それらはハードやソフトの維持に關するものである。さらに、コンピュータでの検索技術の指導を含む図書館の利用指導に關するものもある。充実した資料を有していても検索方法や資料の利用の仕方を知っていなければ資料を活用できない。コンピュータ導入が図書館を取り巻く問題を解決するのではなく、それを運用していく人の存在の重要性を痛感している。コンピュータが導入されてこのような新たな課題を抱えて運営をしている。以上が発表の主旨である。

同志社内の学校図書館は、各々特徴ある活動をおこなっており、二年前には国際中・高の戸田久美子氏が私立学校図書館研修会で発表されている。現在、学校図書館は自学自習能力の育成の場として注目されている。昨年学校図書館法が改正され、司書教諭の配置が義務づけられた。今大会でもコンピュータ以外に学校図書館法の改正を巡る今後の学校図書館のあり方、司書教諭配置の問題が多くの分科会でとりあげられ、討論や意見交換がおこなわれた。改正以前より司書教諭を配置している学校や、改正後配置に向けて準備中の学校もあるが、同志社内での対応は進んでいない。図書館が機能するには設備、資料そして人が三要素といわれている。私学の中で、資料・設備比較的充実しているが、今後、人的処置の配慮がなされ、学校図書館として本校の生徒が学校図書館で学んだ課題解決の技術、力を十分発揮できるような基盤が築かれ、学校図書館の理想に近づけることを希望している。